

平城京左京二条二坊十一坪の調査

—第533次

1 はじめに

本調査区は、平城京左京二条二坊十一坪の西辺に位置し、法華寺の寺域南半部にあった阿弥陀浄土院跡と二条条間路を挟んで南接する。左京二条二坊十一坪では、これまでの調査で中心部に正殿と東西脇殿が「コ」の字形もしくは「ロ」の字形に配置され、坪が一括して利用されていたことが判明している（『年報 1997・1998』）。また、遺構の配置や出土軒瓦の共通性から、平城京左京二条二坊十二坪¹⁾との密接な関連も指摘されており、十一・十二坪を一括した公的な施設の存在が想定されていた（『年報 1997』）。

今回の調査は、集合住宅の建設にともなうものであり、調査区から約3m北に位置する第281次調査や約10m西に位置する第282-16次調査では奈良時代の建物や塀等を確認している。このことから、調査区内にも奈良時代の遺構の存在が予想された。調査区は東西6m、南北45m、調査面積は270m²である。調査期間は2014年7月2日から2014年8月22日に終了した。

2 基本層序と検出遺構

基本層序

調査区内の基本層序は、上から①造成土（20~40cm）、②耕作土（20~30cm）、③床土（20~40cm）、④暗灰黄色砂質土（整地土1:10cm）、⑤灰褐色粘質土（整地土2:20cm）、地山（灰黄色粗砂～淡黄色粘土）の順である。

遺構は、東西溝SD10538のみ④層上面で検出したが、それ以外は⑤層上面および地山面で検出した。

検出遺構

主な遺構は、溝3条、掘立柱建物3棟、塀8条、柱穴2基、土坑1基等である（図272）。遺構は重複関係や検出層位、出土遺物から1~4期に分けることができ、1期が奈良時代以前、2~4期が奈良時代である。2期に関しては遺構の位置関係や出土遺物等から、少なくとも2時期以上の変遷が確認できる。しかし、重複する柱穴がないことや東西の幅が狭い調査区に制約されて全容が不明な遺構も多く、今回は2期のなかに一括して報告する。

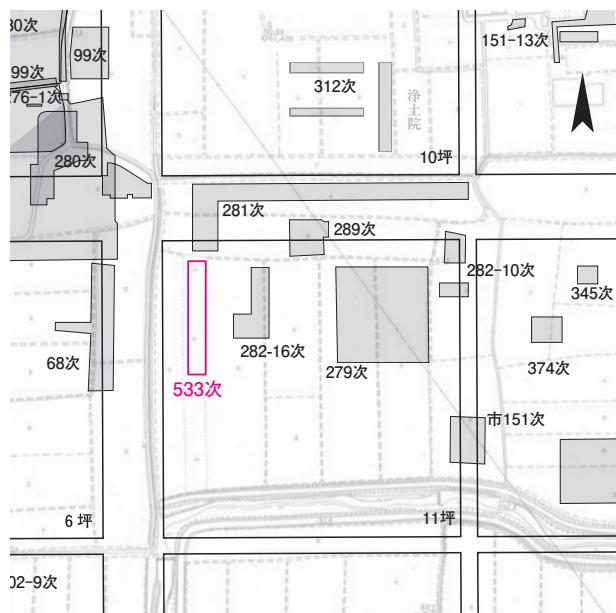


図271 第533次調査区位置図 1:3000

1期の遺構

溝SD10537 調査区南端で検出した。幅2.3~2.5m、深さ45cm。形状から円形にめぐると思われる。埋土は黒色粘質土で遺物は含まない。東西塀SA10526や柱穴SP10527、南北棟建物SB10536により壊される。古墳等の周溝の可能性がある。

2期の遺構

東西大溝SD10525 調査区中央やや北寄りで検出した。幅3.0~3.2m、深さ30~40cm。流水痕跡がなく、埋土は黒褐色粘質土で一気に埋め立てられている。埋土からは奈良時代前半から中頃までの土器が出土した。

東西塀SA10526 調査区南部で検出した。一辺約1m、柱穴2基を検出し、深さ約45cm。柱間約3.0m（10尺）。南に展開する掘立柱建物の可能性もある。柱穴2基は、いずれも掘方に柱根が残存しており、そのうち、東の柱穴には柱根のすぐ脇に別の柱根が残存していた（図274）。この柱根は別の柱穴のものと考えられるが、柱根の沈下を軽減するための補強材の可能性もある。SB10536と重複し、SA10526が先行する。

柱穴SP10527 調査区南で検出した。一辺約1.3m、深さ約0.6m。調査区内には組み合う柱穴がないが、柱間3m以上の東西塀、または掘立柱建物の北西隅もしくは北東隅とみられる。掘方底部で板状の礎板を確認した（図274）。抜取穴からは奈良時代前半の土器が出土した。

東西棟掘立柱建物SB10530 調査区東南部で検出した。東西棟建物の西妻柱とみられる。柱穴は一辺0.9~1.1m、深さ45~60cm。柱間は約1.8m（6尺）。掘方底部では板状の礎板が14枚、井桁状に組まれた状態で出土した（図

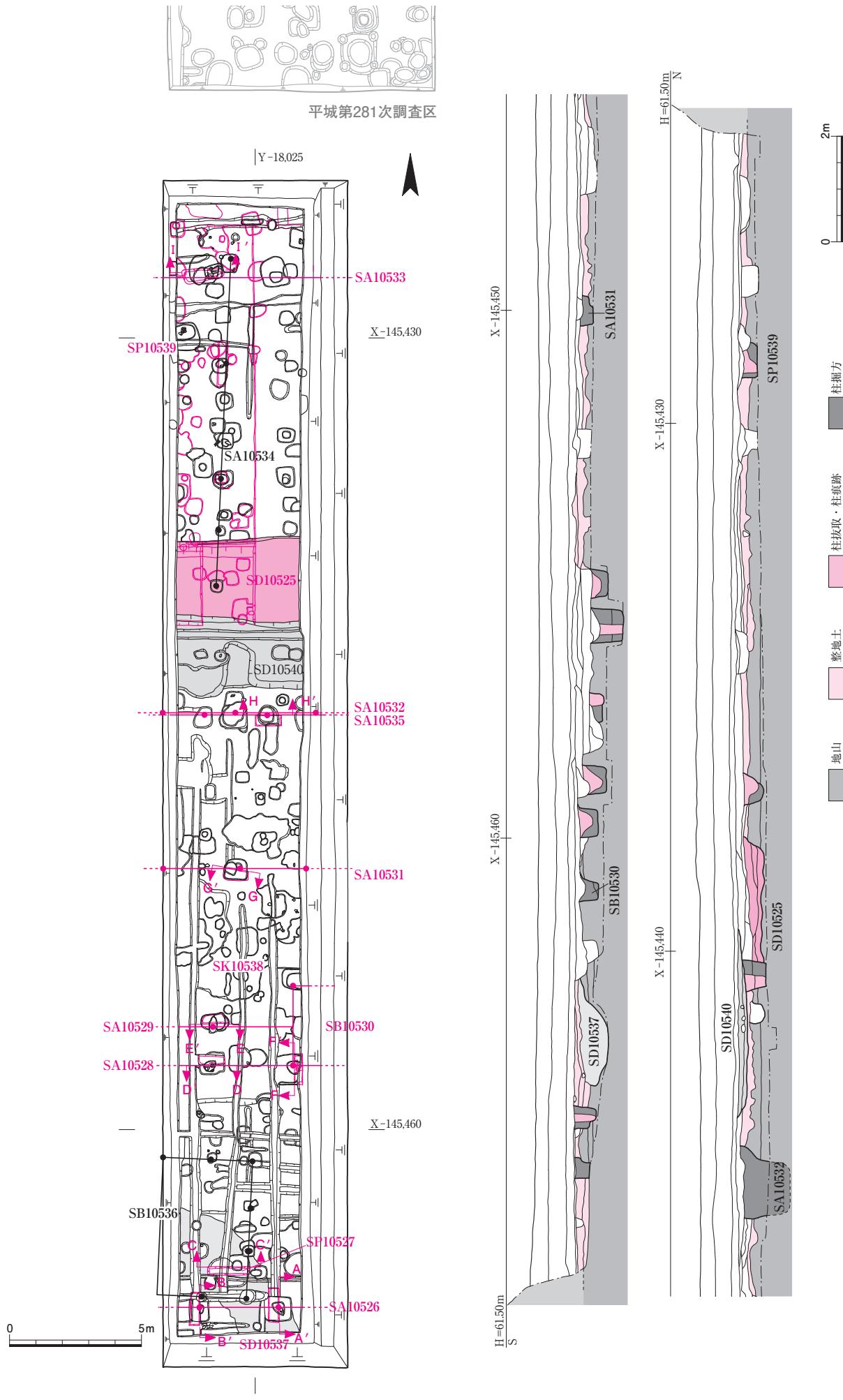


図272 第533次調査区遺構図 1:200

図273 第533次調査区西壁土層図 1:100

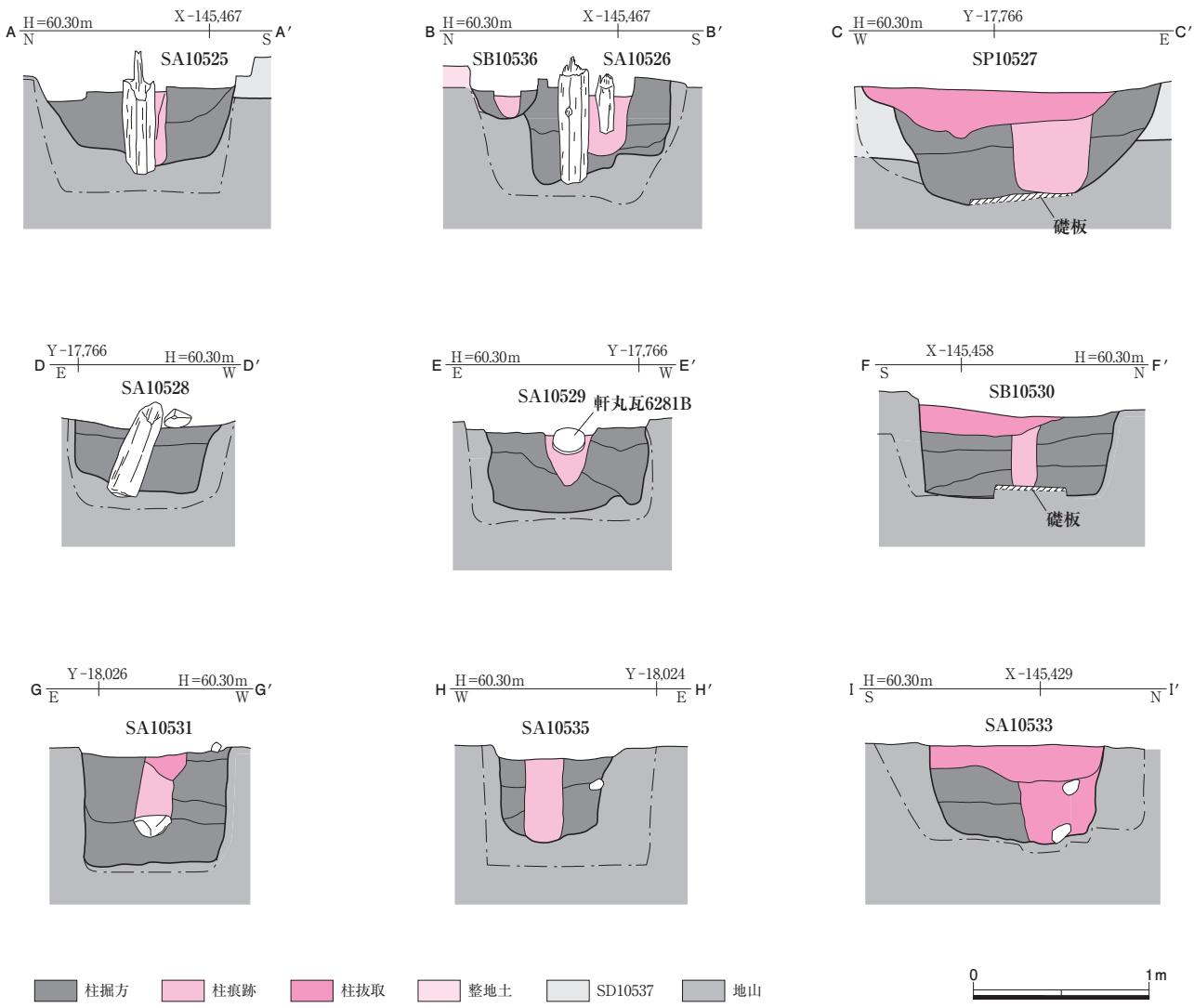


図274 第533次調査区柱穴断面図 1:40

274・279)。

東西塀SA10528 調査区西南部で柱穴1基を検出した。一辺0.8m、深さ約40cm。掘方には柱根が傾いた状態で残存していた(図274)。SB10530に取り付く東西塀の可能性がある。SB10530からの距離は3.0m(10尺)。

東西塀SA10529 調査区西南部で柱穴1基を検出した。一辺約0.8m、深さ約0.5m。SA10529と同様SB10530に取り付く東西塀の可能性があるが、SA10529との前後関係は不明。SB10530からの距離は約3.0m(10尺)。抜取穴から軒丸瓦6281Bが出土した(図274)。

土坑SK10538 調査区南寄りで検出した。大きさは南北約1.0m、東西約0.8m、深さは25cm。埋土から曲物の底板が出土した(図278)。

東西塀SA10531 調査区中央部やや南寄りで検出した。柱穴は調査区東西壁でも確認でき、3基検出した。一辺約1.0m、深さ約0.6m。柱間約3.0m(10尺)。

東西塀SA10532 調査区中央部で検出した。柱穴はSA10531同様、東西壁でも確認でき、3基確認した。一辺約1.1m、深さ約0.75m。柱間約3.0m(10尺)。SA10531

との距離は約6m(20尺)あり、SA10531とSA10532とが組み合い東西棟建物になる可能性もある。

東西塀SA10535 調査区中央部で柱穴2基、3間分検出した。一辺約0.8m。深さ約45cm。柱間約2.4m(8尺)。SA10532と同じ並びにあるが、重複する柱穴がなく、前後関係は不明である。

東西塀SA10533 調査区北部で柱穴2基を検出した。一辺約1m、深さ約0.6m、柱間約3m(10尺)。

柱穴SP10539 調査区西北部で検出した。一辺約0.7m、深さ約35cm。調査区内では組み合う柱穴がなく、西に展開する東西塀の可能性がある。埋土からは墨書き器が出土した。

3期の遺構

南北棟掘立柱建物SB10536 調査区南部で検出した。柱穴は一辺約40cm、深さ約40cm。桁行3間、梁行2間。柱間は約2.1m(7尺)等間。北でやや東に振れている。SD10527およびSA10526を壊す。

南北塀SA10534 調査区北で検出した。一辺40~60cm、深さ約0.5m。6間分検出した。北でやや東に振れるた

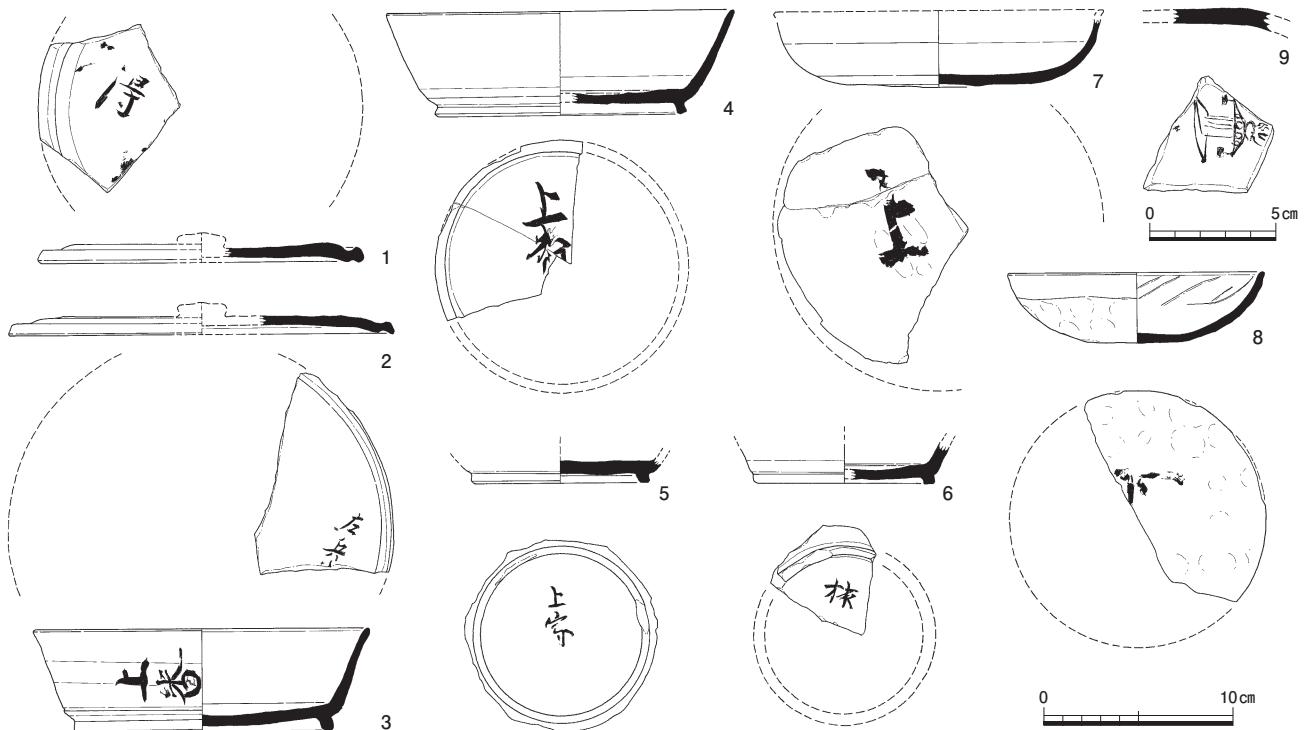


図275 第533次調査出土墨書き土器 1：4（9は1：3）

めSB10536と同時期と判断した。南端の柱はSD10525の埋土の上に建てられる。SA10534の並びには多くの柱穴があり、何度か建て替えられた痕跡がある。

4期の遺構

東西溝SD10540 調査区中央部やや北寄りで検出した。幅約2.0m、深さ約30cm、④層上面で検出した。埋土から出土した土器の年代から奈良時代後半以降と考えられる。なお、SD10540を埋め立てた後に10~20cm大の礫が大量に敷かれていた。そこからも施釉瓦や墨書き土器等が出土している。
(石田由紀子)

3 出土遺物

土器・土製品

整理用コンテナ42箱分の土器が出土した。大半は奈良時代の須恵器・土師器で、特に東西溝SD10540埋め立て後の礫集中からは奈良時代後半から末頃の土器が大量に出土した。

本調査区出土の土器の特徴として、土師器供膳具類(杯・皿・高杯・杯蓋)が多い点、土師器碗Cが多くみられる点、須恵器杯蓋の転用硯が多い点が挙げられる。この他、墨書き土器・漆付着土器・土馬・土錘などが出土した。

墨書き土器(図275) 本調査区からは約20点の墨書き土器が出土した(積読は渡辺見宏による)。1・2は杯B蓋である。1は外面に「得」と記す。SP10539出土。2は内面に「左兵口」と記す。表土出土。3~6は杯B。3は口縁部外面、4は底部外面にいずれも「上番」と記す。本調査区からは「上番」と記す土器が他に2点出土してい



図276 第533次調査出土墨画土器

る。3はSD10540埋め立て後の礫集中、4はSD10540上層からの出土。5は底部外面に「上□[家カ]」、6は「抹」と記す。5はSD10540、6は表土出土。7は土師器碗C、底部外面に「上」と記す。本調査区からは他に「上」と記す須恵器が2点出土している。8は土師器碗Cである。内面にナデ調整のアタリが残る。底部外面に墨書きがある。7・8ともにSD10540出土。9は土師器碗Cの内面に単層の建物の墨画を描く(図276)。基礎の上に縦に長い軸部と宝形造の屋根を描く。屋根の両隅には風鐸らしき装飾が下がる。屋根の上には装飾が乗るが、最上部の表現は三つ又に分かれているようにみえ、鳳凰を表現した可能性もある。また、建物の下方にも墨点が認められることから、他にも何らかの描写が存在したとみられる。④層出土。
(小田裕樹)

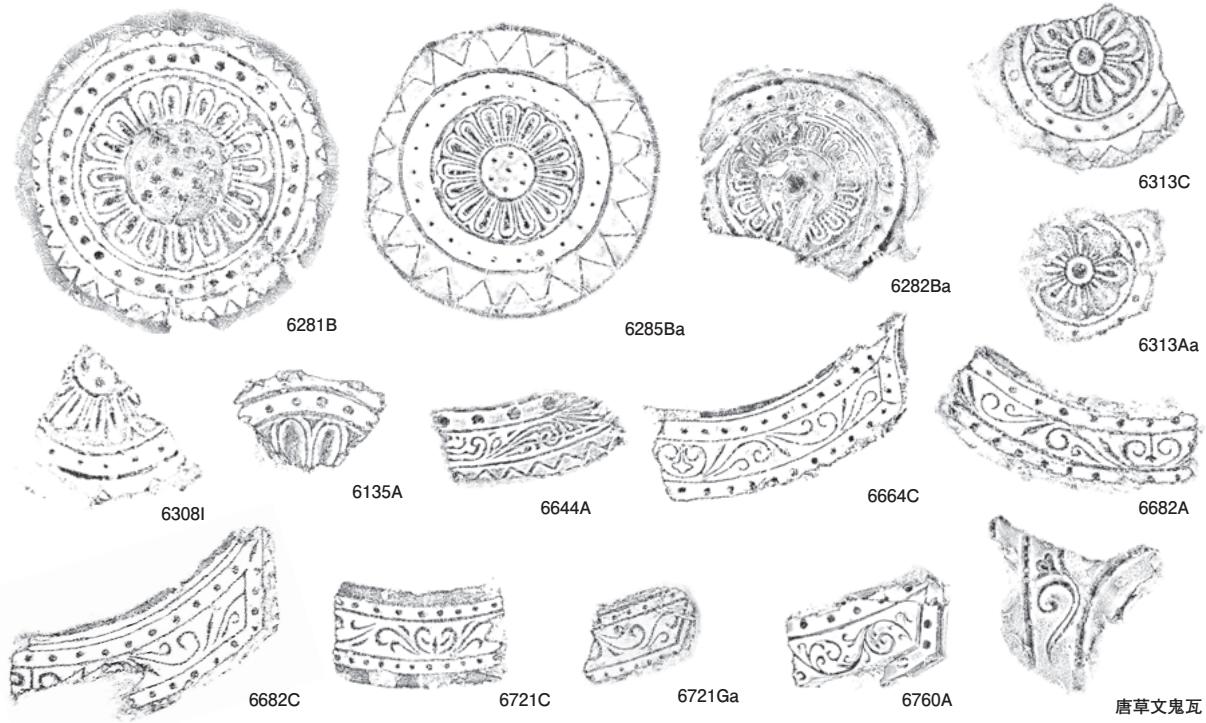


図277 第533次調査出土軒瓦・鬼瓦 1:4

表36 第533次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6135	A	1	6644	A	1	施釉平瓦(緑釉)	1
6272	B	3	6663	A	2	(三彩)	12
6275	D	3		C	2	(施釉/緑・白)	8
6281	B	1	6664	C	1	(施釉/緑・黄)	2
6282	Ba	1	6682	A	4	(施釉/緑)	22
6284	C	1		B	3	(施釉?)	2
6285	Ba	1		C	3	施釉丸瓦(三彩)	3
6308	I	5	6685	A	1	(施釉/緑・白)	2
6311	B	1	6691	A	3	(施釉/緑)	3
6313	Aa	1	6721	C	2	施釉熨斗瓦(緑釉)	3
	C	1		D	1	(三彩)	1
6314	D	1		Ga	1	(施釉/緑・白)	1
奈良		7		?	2	(施釉/緑)	4
時代不明	1		6759(緑釉)	B	1	鬼瓦(唐草文)	1
			6760	A	2	熨斗瓦	1
			施釉(緑・白)		1	面戸瓦	1
			奈良		9	平瓦(ヘラ書)	1
			時代不明		1	瓦製円盤	1
軒丸瓦計		28	軒平瓦計		40	その他計	
丸瓦			平瓦			磚	
重量		79.517kg		212.936kg		5.315kg	凝灰岩
点数		829		2861		5	1

瓦磚類

本調査区から出土した瓦磚類は表36に示した。軒瓦は、奈良時代前半のものが圧倒的に多い。本調査区でもっとも出土点数が多いのは6308Iと6682Aであり、ともに瓦編年のII-2期に位置付けられる。第279次調査では正殿と脇殿をもつ時期の瓦の組合せは6308I-6682Bとする(『年報1997』)。本調査区でも6682Aとともに、6682B・Cも一定量出土しており、6308Iと6682A・B・Cとが組み合う可能性は高い。特に6308Iは、平城宮内ではほとんど出土しないが、左京二条二坊十一・十二坪では集中的に出土し、同坪の所用瓦と考えられる。

また、I-1期の軒瓦が比較的多いことも特徴である。特に6275Dや6281Bなど藤原宮式軒丸瓦の出土が目立ち、

宮造営当初から当該地が利用されていた状況がうかがえる。ほかにもI-1期は6272B-6644Aといった長屋王邸の所用瓦と同様の軒瓦もみられる。

また、6313Aa・C、6314D等、壇棟を想定できる小型の軒丸瓦も出土した。いずれもII-1期である。

奈良時代後半の軒瓦は少なく、施釉瓦の6759B、6760Aの小片が出土した。いずれもIV-2期である。

軒瓦の出土量をみると、100m²あたり25.1点であり、第279次調査区同様、軒瓦の出土が濃密である。丸・平瓦に関しては本調査区の100m²あたりの出土量は108.3kgで、平城宮中枢部の総瓦葺建物の出土量と比べて若干少ないものの、それでもかなりの出土量といえる。調査面積が小さいうえ、床土や整地土からの出土がほとんどで不明な点が多いが、第279次調査でも100m²あたりの丸・平瓦の出土量が114.0kgだったことを勘案すれば、少なくとも左京二条二坊十一坪内に総瓦葺建物等、瓦を相当使用する建物が存在した可能性は高い。

また、本調査では、施釉瓦が多く出土した(卷頭カラー参照)。左京二条二坊十一坪は、平城宮・京内でも施釉瓦の出土が突出して多い(『年報1997』、『年報1998』)。今回の調査でも、平瓦47点、丸瓦8点、熨斗瓦9点の施釉瓦が出土した。ただし、大半は床土やSD10540上面の礫集中からで、調査区内の遺構にともなうかは不明である。施釉瓦は緑釉単彩と、二彩または三彩がある。施釉軒瓦は、小片ではあるが軒平瓦6759Bが出土した。

鬼瓦は唐草文鬼瓦片が1点出土した。平城宮第2次大極殿院(第152次)で同範例がある(『平城報告XIV』)。

(石田)

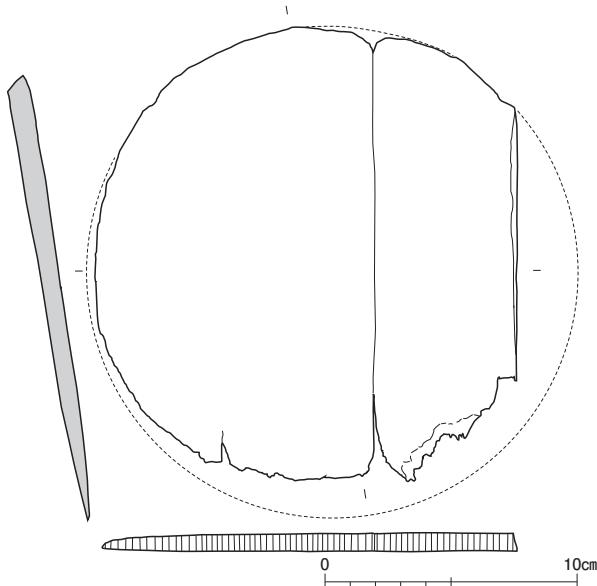


図278 第533次調査出土曲物底板 1:3

木製品・木製部材

曲物底板、加工棒、部材などが出土した。

木製品 図278は曲物底板である。柾目板を素材とする。上端の一部のみ残存し、他の部分は腐食により原形をとどめておらず、木釘痕なども確認できない。復元径19.3cm、最大厚0.9cm。SK10538出土。

木製部材 SA10526柱穴などから柱根が出土したほか、SB10530から礎板が14点出土した(図279)。これらは、長さ30cm~40cm、幅5cm~15cm、厚さ約1cmの板目材である。表裏面に加工痕は認められない。同一材とみられるものも複数あり、転用品と考えられる。

金属製品

銅製蛇尾が3点出土した(図280)。1点は表金具、2点は裏金具で、すべて別個体である。

1は表金具。裏面に3つの鉢足が残る。それぞれの鉢足付近には、別の鉢足痕跡をとどめており、残存しているものは、後補と考えられる。長軸3.9cm、短軸3.0cm、厚さ0.6cm。④層より出土。2、3は裏金具。両者ともに3つの鉢孔を残す。2は、腐食により原型をとどめるのは下端の一部のみである。残存長3.5cm、残存幅2.3cm、厚さ0.1cm。④層より出土。3は長さ、幅ともに1.9cm、厚さ0.1cm。耕土より出土。

(芝康次郎)

4まとめ

本調査では、奈良時代には少なくとも3時期以上の遺構変遷が確認でき、左京二条二坊十一坪の西辺でも建物群が複雑に変遷する状況が看取できた。

検出した遺構の大半は出土遺物が少ないうえに、重複関係も少なく、詳細な時期比定は困難である。ただし、出土軒瓦は瓦編年のI-1期およびII期のものが圧倒的に多く、主に奈良時代前半に大型の建物群が展開してい



図279 第533次調査出土礎板

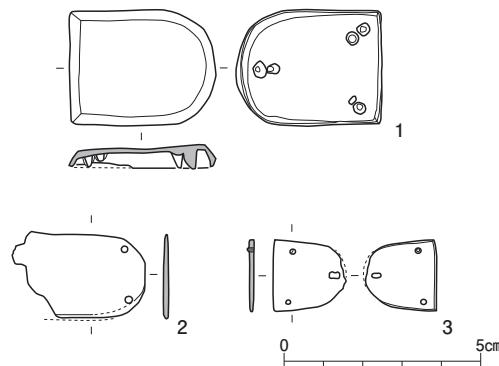


図280 第533次調査出土帶金具 1:2

たことが想定できる。

遺構の全体像がわかるものが少ないため、遺構の組合せに関しても不明な点が多いが、調査区には柱穴掘方内に、柱根や礎板が残存するものが比較的多い。これらを時期的特徴と想定すれば、掘方底部に礎板が残るSP10527、SB10530、SA10533、掘方に柱根が残存するSA10526、SA10528がそれぞれ同時期となる可能性がある。特に坪中心部の正殿SB6994の柱穴掘方には、柱根が遺存するものと抜き取られたものとがあったことが確認されている(『年報1997』)。このような建物解体時の手法を手かがりにすれば、SA10526、SA10528といった柱根が遺存する遺構が、正殿や脇殿等の坪中枢部建物群と同時期であると考えることも可能である。

また、調査区南辺では奈良時代以前の溝SD10537を確認した。遺物が出土していないため、断定はできないが形状から古墳にともなう周溝の可能性があり、奈良時代以前の当該地の土地利用の一端を知る手がかりを得ることができた。

(石田)

註

- 奈良市教育委員会『平城京左京二条二坊十二坪』1984。